

私を堕とせるのはただ一人？いや、こ

こからが恋人だし！

【第3話】

みなぎし　すい

【人物一覧表】

柊千咲（6）（現在）：女子高生

白石彩夏：社長令嬢

柏木奈子：千咲の叔母

神谷里見（12）（現在）：女子高生

杉園愛梨（12）（現在）：女子高生

飯田早苗：女優

向崎珠江（12）：里見の幼馴染

里見の母：医師

里見の父（41）：会社員

院長：院長

教師

看護師 A

看護師 B

○ 柏木宅・居間

柊 千咲と白石彩夏、閉まつた扉を見つめる。

彩夏 「ごめん、ちょっとやりす」

千咲 「ばかっ！」

千咲、彩夏に平手打ちする。

千咲、目に涙を浮かべている。

千咲 「見られた！ 奈子おねえさんにだけはバレたくなかつたのに！」

彩夏 「千咲……」

千咲 「そっち系だつて誤解されたから、奈子さんに合わせる顔がないじやん！ 奈子さんだけはずつと味方でいてくれた大事な人なのに！」

彩夏 「あ……つきり、いいものかと……」

千咲 「いいよなんて言つた覚えないよ！ 霧

囮気だけで押し倒してきてさ！ 別に好き

でもなんでもないのに！」

彩夏 「つ、ごめん……」

彩夏、しゅんとしてうつむく。

千咲 「大つ嫌い！」

○ 同・廊下

千咲、勢いよく扉を開けて走り去る。
柏木奈子、走り去る千咲の背中を見つ
める。

彩夏 「待つて！ 千咲！」

彩夏、居間から出てくる。

奈子 「待ちなさい」

奈子、彩夏の肩を掴む。

奈子「自分の気持ちだけを優先して、千咲ち
ゃんの気持ちを考えずに襲ったの？」

彩夏 「えっと、それは……」

彩夏、うつむく。

彩夏 「はい……」

奈子「そう。千咲ちゃんに嫌われているのな
ら、もう二度と近づかないで」

奈子、その場を去る。

○ 女子高・3の3教室（朝）

千咲、自分の席でゲームしている。

千咲 N 「結局、気まずくて奈子おねえさんと顔を合わせられなくなつた」

彩夏、神谷里見、杉園愛梨、飯田早苗、教室に入つてくる。

彩夏と千咲、目が合う。

彩夏 「千咲……」

千咲 「ふんっ！」

千咲、そっぽを向く。

彩夏、悲しそうにうつむく。

里見 「おいおい、おまえらどうしたんだよお

おえ！」

愛梨 「なにか、変……」

早苗 「彩夏？」

彩夏 「……ごめん」

彩夏、教室から出していく。

○ 同

生徒たち、授業を受けている。

彩夏の席が空席になつていてる。

千咲、彩夏の席をじっと見つめる。
千咲 M 「違うもん。いいなんて言つてないも

ん」

チャイムが鳴る。

教師、挨拶をして教室を出る。

生徒たち、それぞれの輪を作つて喋り始める。

愛梨 「ね、ねえ千咲ちゃん」

千咲 「愛梨ちゃん。何」

千咲、不機嫌そうな表情で反応する。

愛梨 「あの時、千咲ちゃんが目をキラキラさせてきてたから、わたしの家に来たいんだつてわかったよ」

千咲 「あつそ」

○ 同・屋上

千咲、手すりにもたれかかって街並みを見ている。

里見 「こんなところで何やつてんだよ」

里見、千咲のもとへ歩み寄る。

千咲 「なに。1人にしてほしいんだけど。ほ
つといで」

里見「あんなもん見せられてほつとけるかよ」

千咲、拳をぎゅっと握り、唇をぎゅつ
と噛む。

里見「今日、あたしの家に来いよ。その様子
だと、あの人とも気まずくなつて居場所ね
んだろう」

千咲「……」

里見「泊まらせてやるからよ、落ち着くまで
うち来いって」

○神谷宅・居間

里見「ゆつくりくつろいでいけ」

千咲「……」

千咲、部屋の隅に荷物を置き、椅子に
座つてゲームを始める。

里見「ほらよ、ジユースとクツキー」

里見、机にオレンジジユースとクツキ
ーを置き、机に座る。

2人、ジユースとクッキーを食べ始める。

千咲 「優しいじやん、里見ちゃん」

里見 「友達だから。千咲は優しいから、家に呼んでもいいと思ったんだよ」

千咲 「そう。で、何があつたか聞きたいの？」

里見 「ああ、そうだよ」

千咲 「でもプライバシーだから。知られたくないから」

里見 「友達だったら、困つてるとときは、力になりたい、それが普通だろ？」

千咲 「そうだね」

里見 「……なるほどな、なんとなくわかつたよ。プライバシーってそういう」

千咲 「うわ、バレた。最悪」

里見 「悪い。でも深くは聞かねえし、間違つてもバラしたりしねえから安心しとけ」

千咲 「……わかったよ」

○ 同（夜）

里見の母、里見の父（41）、里見、

千咲の4人が晩ごはんを食べている。

里見の母「もうすっかり足はいいの？」

千咲「はい、おかげさまで」

里見の父「事情があるんだろう？」それなら、

落ち着くまでゆつくりしていってくれ」

千咲「はい」

○同・寝室（夜）

暗い部屋。2人、大きめの同じベッドで仰向けになつている。

千咲「バラしてないよね」

里見「そんなことするわけねえだろ」

千咲「優しいね、彩夏と違つて」

里見「彩夏がなんかバラしたのか？」

千咲「うん……いや、ちょっと違うけど、奈

子おねえさんが帰つて来てるのに気づかなくて。ほんと、タイミング悪い」

千咲M「あれ。なんでこんなこと話して……
バレたらよくないかもしれないのに」

里見、L I N Eを開く。

○女子高・3の3教室（朝）

生徒たちが、しやべったり勉強したりしている。

早苗、愛梨、彩夏の3人が彩夏の席の近くにいる。

愛梨「里見ちゃん、休みだね、L I N Eで、出かけるから休むつて、昨日突然連絡きて」

早苗「柊も休みみたいだけど。彩夏、何か知つてるの？」

彩夏「知らないよ⋮⋮」

涙が、彩夏の頬を流れ落ちる。

彩夏、両目の下を手で押さえる。

早苗「嘘が下手すぎ。まあ詳しくは聞かないけど、次彩夏を泣かせたら柊のこと許さないから」

彩夏「そ、それはちょっと⋮⋮」

早苗「はあ。ほんっと、彩夏ってばお人好し」

○ フアミレス

昼の日差しが店に差し込む。
たくさんの客たちがいる。

千咲と里見、横並びに座っている。目の前に料理が置かれている。

里見「グループLINEに連絡しといたから。

今日は休め」

千咲「もう昼だけど……っていうか、そんなことしてたんだ」

里見「見てねえのかよおおえ！……ああいや、見たくないなら仕方ねえな」

千咲「……」

里見「で、千咲はなんて言つてそんな状況になつたんだよ。そこがわからんねえと、お前が悪いのか彩夏が悪いのかわからんねえぞ。バラさねえから話してみろって」

千咲「はあ」

千咲、ため息をつく。

千咲「わたしは、友達だって何回も主張してた。だけど……これ以上言わせないで。恥

ずかしいし、彩夏に悪いから」

里見「千咲、やっぱ優しいじやねえかあおえ
！ なんでそんな怒つてまで彩夏気遣うん
だよおおえ！」

千咲「だつて、里見ちゃんと彩夏は友達じや
ん。里見ちゃんの大事な友達にひどすぎる
ことできない。まあ、大嫌いってひどいこ
と言つてきたんだけどね……」

里見「まあ、千咲と彩夏と早苗はあたしの大
事な友達だ」

千咲M「……やっぱ、愛梨ちゃんと何かあつ
たんだ」

千咲、そわそわする。

里見「そんな気になるなら教えてやるよ。ま
だ誰にも教えてねえことをな」

○（回想）森の中

快晴の天氣。

里見N「あたしと愛梨、そんで、幼馴染のた
まちやんつてやつがいたんだ。あたしは、

たまちやんが大好きだつた」

大きな木がたくさん生えている森の中。
張つてあるヒモにつかまつて道をのぼ
つている愛梨（12）、里見（12）、

向崎珠江（12）。

里見N「愛梨は、森の中に張つてあつたヒモ
を面白半分で揺らした。面白半分……だつ
たと思う」

愛梨、ヒモを揺らす。

珠江、手を滑らせて落ちる。

○山・麓

救急車に運ばれしていく珠江。

里見、泣きながら走り去る救急車を見
る。

（回想終わり）

○ファミレス

里見「斜面を転げ落ちたまちやんは病院に
運ばれたけど、結局死んだんだ。愛梨は、

あの場から逃げた。そんなやつと、友達なわけねえだろ」

千咲「それは、謝られたの？」

里見「ああ、何回もな！ 必死に謝つてこられたよ！」

里見、叫んで机を思いつきり叩く。

里見「あ、怒鳴つて悪い。でも、千咲には話したくなつたんだよ」

千咲「そつか、ありがと。やっぱ、友達っていいなあ……」

千咲の目からぽろぽろと涙が溢れる。

里見「何泣いてんだよ」

涙が机に落ちる。

千咲「な、なんで。大嫌いなはずなのに」

千咲、涙を腕で拭く。

千咲「こんな気持ち、嘘だ」

里見、千咲にポケットティッシュを渡す。

里見「苦しむくらいなら、自分に正直になつた方がいいぜ。ほら、心の中に思つたこと

だけをするつてことだよ」

千咲「でも、大嫌いって言つた」

里見「もう1回よく考えてみろ。嫌いじやないなら早めに言えよ？お前の本心はなんて言つてんだよ」

千咲「わかんないよ……」

里見「嫌いならなんで泣いてんだよ？」

千咲「それは……」

里見「千咲。お前はあたしの大事な友達なんだ、友達が泣くのなんて見たくねえよ。健康つてのは、心の健康も含まれてんだからな？」

○（回想）病院・病室

院長（50）、千咲（6）と向かい合

う。

院長「おめでとう、よくがんばったね」

千咲「ねえねえ！　なんでおいしやさんやつ

てるの？」

院長「みんなを笑顔にするためだよ」

(回想終わり)

○ フアミレス

千咲 「あ……」

里見、千咲を抱き寄せる。

千咲 「あ、あつたかい……あ、涙が止まらな
いよ……」

千咲、大粒の涙をこぼす。

里見M 「やれやれ。仕方ねえな」

○ 女子高・屋上

千咲 「里見。放課後にこんなとこ呼び出して
何」

里見 「いいからここにいろって」

千咲 「ちよつと意味わかんない」

里見 「そろそろあたしは行くからな！」 戻つ
てくるまでここ動くんじやねえぞおおえ！」

里見、屋上出入口の扉を開けてどこか
に走り去る。

千咲 「何を？ なんか持つてくんの？」

しばらく時間が経つ。

千咲「はあ。日が暮れそうになつたら帰ろう」

階段を上がつてくる足音がする。

千咲「あ、來た」

扉が開く。

千咲「え？」

彩夏が出入り口から出でくる。

彩夏「あれ、里見に呼ばれて來たのに、なん

で千咲が」

千咲M「里見ちゃん、まさか」

2人のあいだに流れる沈黙。

彩夏、千咲「えっと……あつ」

千咲「な、何？」

彩夏「えっと、その」

千咲「何かあるなら早く言つてよ」

彩夏、うつむく。

彩夏「わたし、千咲を好きつてことばつか考

えてて、千咲の気持ちを考えてなかつたの」

千咲「知つてる」

彩夏「大好きな気持ちって、押さえるのが難

しいんだね……初めて知ったよ』

千咲「そう」

彩夏「だから、その……ごめんね。もう友達には戻れないね』

千咲、拳を握つて歯を食いしばる。

千咲「ばか！」

彩夏「えっ」

千咲「わたししだって、いっぱい悩んだの！」

大嫌いなはずなのに、ずっと胸が苦しくて
さ……』

彩夏「千咲……』

千咲「わたしの気持ちも考えずに、友達やめるなんて言わないでよ！」

彩夏「えっ？」

千咲「つ……ああもう！」

千咲、彩夏の目の前まで歩く。

千咲「はい！ 友達！」

千咲、むりやり彩夏と握手する。

彩夏「いいの？ こんなわたしで』

千咲「彩夏みたいにかわいくて優しい友達だ

から好きになつたんだよ！ 友達としてね

！」

彩夏 「…ふふつ」

彩夏、笑う。千咲、笑顔になる。

○白石宅・寝室（夕方）

ベッドに転がる2人。

千咲 「でも、あれはやりすぎだから禁止！」

その…あんなえっちなの、は、恥ずかしいから…」

千咲、頬を赤らめてもじもじする。

千咲 「く、悔しかつたらわたしを惚れさせてみてよね！ えつちなこと以外で！」

彩夏 「ふふつ。そうだね」

千咲 「でも…彩夏がそんなにしたいなら、お、おっぱいとキスくらいなら許してあげる。そのくらいだったら、友達でもするから…」

彩夏 「ふえつ」

彩夏、頬を赤らめる。

千咲、彩夏の唇に自分の唇を重ねる。

千咲「んっ」

彩夏 M 「千咲からこんなこと……あ、好き、

好きっ」

2人、舌を絡めあう。

彩夏、千咲の胸を揉みしだく。

千咲「んっ！」

彩夏 M 「やば、えっちすぎる」

彩夏の指が千咲の胸の突起に触れる。

彩夏、千咲の胸の突起をつまむ。

千咲「んっ！ んっ！」

腰をビクビク震わせる千咲。

互いの唇が離れる。

千咲「や、やつぱ恥ずかしいつ……こ、こん
なのほほやつちやつてるよ……」

彩夏「やつぱ、なしにする？」

千咲「でも、友達だし……」

彩夏「好き」

再び、2人が口づけする。

しばらく胸を揉まれ、キスをされ、喘

ぐ千咲。

○柏木宅・玄関（夕方）

千咲「ただいま……」

奈子「おかえり」

千咲「心配かけてごめんね。もう大丈夫だか

ら」

千咲、自分の唇に手を触れる。

○女子高・3の3教室（朝）

千咲、自分の席に座っている。机には教科書とノートが広げられている。

千咲N「あれから一部を隠して事情を説明し、奈子おねえさんも彩夏を許してくれた」

千咲、唇に手を添えている。

千咲の頬が赤くなる。

千咲M「彩夏、すごかつた……いやいや、何

考えてんの……友達、友達だから……」

彩夏「千咲！」

彩夏、早苗、里見、愛梨が教室に入つ

てくる。

千咲「おはよ、彩夏！ それと。里見ちゃん、
ありがと」

千咲、里見に向かってにこっと笑う。

里見、頬を赤らめる。

里見「お、おう…お前は友達だからよ」

千咲「里見ちゃんお医者さんになるんでしょ
？ 応援したい。わたしのぶんまでがんば
つて！ 優しいし、きっとなれるよ！」

千咲、依然にこにこした表情を里見に
向けている。

愛梨、悲しそうに千咲を見つめる。

里見M「な、なんだ…これ」

里見、自分の胸を見つめる。

○病院・資料室（朝）

看護師たち、資料を見たりしている。

看護師A「ねえ。最近、17年前の三つ子の
1人が病院に来たんだけど」

看護師B「三つ子？ そういえばそんな話あ

つたつけ

看護師A「これ」

看護師Aが見せた資料3つのすべてに、

柏木の苗字が書かれている。